
相棒【老女と猫】

みい×2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相棒【老女と猫】

【Nコード】

N3615J

【作者名】

みい×2

【あらすじ】

上品そうな老女が警視庁に現れた。

彼女は猫を捜して欲しいと言うのだが・・・もちろん事件性があるとも思えず誰も相手にしない。

そこで案内されたのは特命係。

興味を持った杉下警部が相棒の亀山刑事と共に老女を助ける。

Ⅱ 1 Ⅱ 老女と猫（前書き）

ドラマ「相ノ棒」を下敷きにしたファンフィクションです。

「 1 」 老女と猫

いつもどこか慌しい、警視庁。

一般人が自らすすんでここを訪れるのは、事件がらみ・・・そんなことはめったにないのだが。

今、警視庁ロビーに一人の老女がぼつんと佇んでいた。

上品そうな洋服に身を包み、雨が降っているわけでもないのに、大きな傘を杖がわりにもたれかかり、ちよつと困った顔でぼつと前方の受付を見ていた。

その足は、踏み出そうか、踏み出すまいか、迷っているようで。

その場にいる人は、彼女に話しかけることもなく、流れるように通り過ぎる。

まるで彼女を避けるように、するつと海流にのるような・・・

——ここは、大きな水槽なの？

彼女が、諦めたように下を向き、踵を返そうとした途端、その流れが崩れた。

どん

ぶつかって、彼女はその場に崩れる。

しまった———そういう顔の長身の男が急いで彼女の腕をとる。

「大丈夫ですか？」

ちよつと強面な長身の男の顔を見て、ふつと老女は緊張した顔を崩した。

いつもどこか別世界、警視庁特命係。

一般人が自らすすんでここを訪れるどころか、その存在は知られていない・・・あたりまえのことだが。

いつものように、杉下右京は紅茶の香りを楽しみながら・・・と、その時。

「コラ！特命係の亀山〜」という声が聞こえた。

ちらりと見ると、やはり捜査一課の伊丹刑事がキョロキョロと特命係を見渡していた。

「亀山君なら、ここにはいませんよ」

杉下警部しかいない特命係に少しうろたえながら、伊丹はここによいよと説明しながら、老女を案内した。

「こちらのご婦人が捜査を依頼したいというので・・・内容を聞くと、この・・・特命係の担当だと思って案内したんですよ。

さ・・・こっちで、さっきの話をしてくださいね・・・じゃ、案内しましたよ！」

一応老女には優しく接しているようだが、後半は捨て台詞のように

つつけんどんに言い捨てて逃げるように去っていった。

「おや・・・」

あつというまに去ってしまった伊丹を見ながら、杉下警部は入り口で佇む老女に笑いかけた。

「どうぞ・・・お座りください」

すすめられるままに椅子に座り、出された紅茶に口をつけると、人心地ついたのか、老女は「捜査をお願いしたいんです」と話を切り出した。

「ほう・・・」

老女の話に興味深げに聞きながら、杉下はほくそ笑んだ。

「まるで、ポーの黒猫ですね」

そう呟いたとき、特命係に亀山薫が戻ってきた。

「ただいま戻りました・・・右京さん、黒猫がどうしたんですか？
・・・あ、来客中でしたか・・・こちらは？」

物静かな杉下とは対照的な亀山の登場に、老女は慌てて席を立ち、ぺこりとお辞儀した。

「お帰りなさい、亀山君。」

こちらは・・・なんとおっしゃいましたか？

僕としたことが・・・話に夢中で、お名前を聞いていませんでした」
「私は・・・蘭子。只野蘭子と申します」

彼女の話はこうだった。

一週間ほど前にお隣の茶飲み友達のお爺さんが亡くなった。
死因は心臓発作。
事件性はないものとして処理された。

「病気で亡くなったんじゃない・・・捜査しようにも、ねえ。
事件になってないから、捜査はできないんですよ」
亀山が蘭子さんに説明しようとした。

「亀山君、蘭子さんの話はまだ続くんですよ」
杉下警部の言うとおり、蘭子お婆さんの話には続きがあった。

蘭子さんとお爺さんは猫好きで、蘭子さんの飼ってる猫はしばしば
お爺さんのところへ遊びに行っていた。
しかし、お爺さんが亡くなったその日から・・・
猫の姿を見てない。

「・・・で？猫でしょ・・・どうかいたりしますよ、そりゃ。
犬だったら鎖で繋いでるでしょうが、猫は自由ですから、どこかへ
行っちゃったんじゃないですかあ？
そうだ！近くの交番で迷い猫の情報なかったか聞きましたか？」

「それが・・・交番でもそんな情報はないし、見かけたら知らせる
と言ってくれたんですが・・・
搜索まではしてくれないんです・・・何か、お爺さんのことといい、
嫌な予感がするんです・・・」
と言って、蘭子さんはすっかり肩を落とす。

猫の失踪と、お爺さんの病死が繋がっているとは思えないと、亀山
は思っていた。

ただ、猫がいなくなってますっかり気を落としている蘭子さんを元氣

づけようと思った。

「よかつたら・・・空いた時間にも猫探し手伝いましょうか？」

「亀山君」

「あつと・・・非番の時とかに猫探し手伝おうかなって。

勤務中じゃないですよ、右京さん」

「いえ・・・僕が言いたいのには・・・」

エドガー・アラン・ポーの『黒猫』を知っていますか？」

いきなりの杉下警部の問いかけに、亀山はえへつと・・・なんだっけ推理小説でしたよねえと腕を組んだ。

「そうです。

僕はこの件に興味を持ちました。

・・・行きましょう」

颯爽と席を立つた杉下警部はコートを抱えて、蘭子さんをエスコートした。

「ええっ！行くって・・・これからですかあ？」

いつもながら唐突な杉下警部の行動に驚きながら、亀山も急いで後について行った。

「 2 」 隣は何をする人ぞ（前書き）

杉下警部「前回までのあらすじですね。一人の老女が特命係に來られて、猫を探して欲しいとのことでした。ただならぬ氣配に、僕はエドガー・アラン・ポーの『黒猫』を連想したのですが・・・これは特に事件にはなっていないようです。そこへ龜山君が老女を助けようと猫探しを引き受けまして・・・この龜山君と言うのはですね・・・」

「龜山「右京さん、もういいですから・・・本編いきますよ」

「 2 」 隣は何をする人ぞ

特命係の二人は、蘭子という老女の家に来てきた。

「どうぞ、あがってくださいな」

蘭子さんの家はなかなか立派なものだった。

「ここにお一人で住んでらっしゃるんですか？」

杉下警部の問いかけに、蘭子さんは頷いた。

「一軒家に一人は寂しくって・・・猫を飼ってるんですよ」

蘭子さんの話に「なるほど」と言いながら、庭を歩く。

「で・・・どのあたりで猫は居なくなっただんですか？」

杉下警部の質問に答えるべく、蘭子さんは生垣を指差した。

「その木の向こうが、お隣のお爺さんの家です」

指差された所は、生垣の木が一本だけまだ若い部分。

小柄な人なら出入りできそうな、ちよつと不自然なほどに、その部分だけの生垣がまだ新しい。

「これは、猫だけでなく自由にお隣さんとの行き来ができそうですね」

「ええ・・・昔はよく分け隔てなくお爺さんと行き来したいたものですよ」

「で、猫は・・・そこから隣に遊びに行ったきりだというんですね？」

亀山の確認に、蘭子さんは頷いた。

「お隣は、今誰もいないのですか？」

杉下警部の問いに、蘭子さんは暗い表情で俯いた。

「いえ・・・お爺さんは、ほんの1月程前に結婚したので、今はお嫁さんが・・・」

言いにくそうに、俯いたまま、所在なげに手にした杖代わりの傘を弄っていた。

「・・・では、お隣さんに猫を見かけなかったか聞いてみましょう」
「駄目なんです・・・私が行くと、いつも話も聞かずに門前払いで・・・」

「我々が聞いてきますよ、ね？亀山君」

「はい！右京さん」

ピンポン

玄関チャイムが鈍く鳴った。

蘭子さんの家も立派だったがモダンな洋風の家だった。

こちらは純和風の厳格そうな家。

玄関から顔を出したのは、20代くらいの若い女性。

「こちらのお宅にお伺いしたいことがあるのですが・・・お家の方は？」

「・・・私ですが？」

「ええっ！お爺さんのお嫁さんって・・・あなたですか？」

「そうですよ？何？・・・爺さんの知り合い？」

驚いている亀山の横で、杉下警部が「失礼、こういう者です」と警察手帳を見せる。

「・・・刑事さん？なんで？」

「猫を探しているんですよ。この近くで猫を見かけたり、鳴き声を聞いたりしませんでしたか？」

「いいえ！」

「・・・隣の婆さんが猫を飼って、時々うちに出入りしてましたけど・・・」

「爺さんが死んでからは見てないわ」

「・・・そうですか」

にこやかに警察手帳をしまいながら、杉下警部は素早く家の中を見渡す。

「・・・もういいですか？」

「私、忙しいんですけど！」

「・・・これは失礼しました」

さっと出て行こうとする杉下警部と亀山に、女は嫌味を言う。

「警察も暇ねえ。」

隣の婆さんの猫探しなんて・・・馬鹿馬鹿しい」

きつい香水の匂いをふりまきながら、女は長い髪をかきあげた。

「・・・失礼しました」

女の態度にイラつきながら、亀山は玄関の扉を閉めた。

「なっ！なんで亀がここにいたんだよっ！」

聞き覚えのある声に、亀山は「なんだと？」と振り向く。

そこには捜査一課の伊丹刑事が驚いた様子で立っていた。

後ろには同じく捜査一課の芹沢刑事と三浦刑事。

何か事件なんだな、と亀山の刑事心が騒ぐ。

「おや？捜査一課の皆さんがお揃いで・・・何かありましたか？」

「警部殿、どうしてここに？」

三浦がキョトンとした顔で聞く。

「どうやってここに辿りついたんですか？」

「そりゃ、刑事のカンってやつだ」

芹沢がさすが・・・と言いかけた時、伊丹は気付いた。

「・・・違うぞ、俺たちとは追っている事件が違う・・・だろ？」

伊丹の鋭い問いに、「なんのことかな」と亀山はとぼけようとしたが、杉下警部はあっさりと「そのようです」と言った。

「行きましよう、亀山君」

「右京さん」

「僕たちの用事は済みました」

フンと勝ち誇ったような伊丹が、コホンと咳払いしてから玄関チャイムを押した。

さつきと同じく、若い嫁が顔を出す。

「警察ですが・・・」

いつも通り警察手帳を出そうとした伊丹だったが、女はこれが二度

目なのでピシヤリと玄関扉を伊丹の鼻先で閉めた。

何が起こったのか、一瞬戸惑っていたが、伊丹は玄関先で声を張り上げる。

「ちよつと！扉を開けてくださいよっ！！
聞きたいことがあるんです！」

「しつこいなあ！猫なんて知りませんってば！！」
女のヒステリックな声に、伊丹を含め捜査一課の三人は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

「・・・猫お？」

思いがけず一部始終を見てしまった特命係の二人が、プツと堪えきれず噴出した。

「猫じゃなく、あんたがヘルパーに行ってる小川さんの事について
事情を聞きたいんですよっ！」

伊丹の言葉に、そろそろと玄関扉が開いた。

「・・・すみません。」

さっき来た刑事さんに猫のこと聞かれて・・・つい」

やっと開いた玄関扉と、背後でクスクス笑う亀山の姿を交互に見ながら、伊丹は悔しそうな顔をしていた。

「 3 」 縁（前書き）

亀山「蘭子さんというお婆さんに猫を捜してほしいといわれ、隣家を訪ねたところに伊丹のヤローがやってきた・・・何やら事件での聞き込みのようだ。気になるなあ・・・ちよつと、気にならないんですか！？右京さあん・・・」

「 3 」 縁

「ですから・・・あなたがヘルパーとして小川さん宅に行ったのは昨日の午後4時。

その後身の回りの世話や夕飯を作って・・・帰ったのは6時ですね？」

「・・・そうです、きつちり6時というわけじゃなかったけど。ヘルパーステーションの記録見てもらえばわかるでしょ！
一体何なんですか？」

強面の伊丹の問いかけに不機嫌そうに答える女。

「・・・火事で亡くなったんですよ、昨日」

「ええっ！火事って！！」

「そんな・・・まさか・・・」

「なにか・・・いつもと違うことなどありましたか？」

「・・・いいえ。」

「あ、小川のおじいさん、ちょっと最近塞いでて・・・
株で失敗したみたいなこと言っていました」

「ほう・・・」

「あの・・・こういうこと聞いて回るのって・・・
何かあるってことですか？事件なんですか？」

「いえ。」

小川さんにはこれといった身寄りの方がいらつしやらないようなので、最後に会っているのはあなたということだったので・・・
お話をうかがっただけです。
では・・・これで失礼します」

玄関先で話を済ませ、立ち去ろうとした時、すでにどこかへ行った
と思っていた特命係のふたりに再度出くわした。

「ちよつと！話聞いてたんですかあ？」

芹沢刑事が嫌そうに言った。

「もうひとつ、こちらの方にお聞きしたいことがあります・・・
戻ってきたのですが、あなた方がお仕事でしたので、待機してい
たんですよ」

一部始終聞いたであろう杉下警部はしたたかに笑った。

「・・・わざとだ」

うなるように伊丹がつぶやく。

「なんだと！偶然だよ、偶然♪」

亀山が伊丹の睨みをかわした。

「まあ、いいじゃねえか。」

警部殿、どうやら我々の事件は自殺ということでカタがつきそうで
すよ。

残念ながら・・・おい、行くぞ！」

三浦刑事が杉下警部の横をすり抜けながら言った。

「おや・・・そうですかねえ・・・」

「そうですよ！」

練炭自殺しようとして、それが火事に繋がったことで捜査は終わりです！」

芹沢刑事が思わず事件のことを喋ってしまったて、伊丹に叩かれた。

「なるほど・・・それは、自殺のようですねえ」

伊丹に叩かれたおでこを押さえながら、「でしょ？でしょ？」と芹沢が言う。

ブツブツいいながら捜査一課の三人組がその場を後にした。

「さ、もう一度彼女にお話をうかがいましょう」

特命係の二人の再度の訪問に女は明らかに嫌そうな顔をした。

「もう・・・一体なんなのよ！」

「失礼。実は・・・あなたのおっしゃるとおり、隣の方に頼まれて我々がこちらに来ているんですが・・・」

「ちょ・・・ちよつと右京さん！」

いきなり何を言い出すのかと、亀山が物を言いたそうにするのを、さつと手で止めて、杉下は話を続けた。

「・・・ちよつと気付いたことがありますて。
もしかして・・・」

お隣の方は時々こちらの縁側にいらしていたんじゃないありませんか？

いえ・・・どうもお隣で真新しい生垣の木が気になりまして・・・
何かトラブルでも？」

杉下警部の親身になりますよという風な問いかけに女も気を許した
ようだった。

「・・・実はね。
私も困ってるの。」

あの婆さん、昔はこの家の爺さんと仲が良くってねえ。
刑事さんの言うとおり、向こうの庭とこっちの庭は通じてたのよ！
でも・・・

そんなの私からしたら気持ち悪いじゃない！
いくら爺さんと友達だって言っても、勝手に出入りされちゃたまん
ないわよ」

「ですよ〜」

「だから、生垣の通路を塞ぐようにして貰ったの！」

「そうですかあ。」

だからその部分の生垣がまだ若いんですねえ」

「え・・・まだ若い？」

そんなはずないわよ、もうずいぶん経つんだから、もう立派に生垣
になってるはず・・・」

女の問いかけに、杉下は自分の目で確かめてみてくださいと笑った。

女はバタバタと庭先へ向った。

「・・・何よ！これ・・・全然成長してない！

「・・・っていうか、これ、枯れてるんじゃない?！」

「・・・なるほど、こちらの庭から見ると・・・むしろ若木というより枯れて見えますね」

呑気な杉下警部の声に、女は「いつのまに・・・」と怪訝な顔をした。

「失礼、あなたがバタバタとこちらに向うので、つい一緒についてきてしまいました」

お婆さんの庭からは若木に見えた生垣も、こちらから見ると、茶色く枯れかかっている木に見えた。

周りの生垣は青々として、お婆さんの家との壁として立派に役にたっているというのに、この有り様では目をこらすとお婆さんの家が見えるほどだ。

女が地団駄踏む傍らで、杉下警部は縁側を見ていた。

趣のある縁側だった。

お茶を飲みながら、この家の主とお隣のお婆さんが日向ぼっこしている様が容易に想像できた。

「縁の下の細工も見事ですなぁ」

「へ?」

杉下警部の問いかけに女が振り返った。

「この、床下を塞ぐ木に通気性がいいうまく細工してあるのがいいですね。」

見ようによつては花の模様のようにも見える・・・職人技ですねえ」

「はあ・・・そうですか」

女は興味なさに言った。

「おや？さっきの様子からして、あなたはこの家のお庭や縁側にはあまり近付かなかったようですね」

「ええ・・・私、ヘルパーの仕事をしてて、家にばかりいるわけじゃないので！

生垣がこんなになってることを教えてくださったことは感謝します。はやいうちに新しい生垣にしてもらいますっ！

これがもし隣の婆さんの仕業なら訴えることができます？」

つつけんどんな女の質問に、「もし証拠があつて、お隣のお婆さんだと確証があれば・・・」とごによごによと亀山が応えているのを他所に、杉下警部は縁側を眺めていた。

「右京さ〜ん」

心底困った風な亀山の言葉に、やっと杉下警部は縁側から離れた。

「 4 」 蜜柑（前書き）

伊丹「なんで俺が・・・ち、しょうがねえな。火事で死んだガイシヤが最後に会ったという介護ヘルパーの女性宅で特命係にでくわした・・・結局、事件でなく自殺で片がつきそうだが・・・特命の奴らは何しに来たんだ？・・・何？猫お！？」

「4」 蜜柑

「ひとつ、よろしいですか？」

杉下警部が人差し指をたて、女に尋ねた。

「貴女は、こちらのお庭には殆どいらっしやらなかったとおっしゃいましたね？」

「ええ・・・ほとんど外出してるし」

「縁側に座られたりすることも・・・？」

「当然、ないです」

「では、縁側で蜜柑を食べるなんてことも・・・ないですよね」

「・・・蜜柑？なんで、また」

「いえ・・・蜜柑の皮があるので」

杉下警部の言うように、縁側の下に蜜柑の皮が落ちていた。

つい最近も物のようで、みずみずしかった。

「なんで！」

怒ったような声で女が近寄ると、縁の下の細工の部分からチラリと見えたのは・・・たくさんの蜜柑の皮。

いまにも爆発しそうに髪を逆立てて怒った女は、隣のお婆さんの作業だと騒いだ。

「・・・あいつよっ！」

もう、いい加減腹が立った・・・怒鳴り込んでやるっ」

「ちよつ・・・ちよつと抑えて・・・」

とりあえずなだめようと、亀山刑事が女を止めた。

「お隣のお婆さんの仕業かどうかはわかりませんが、我々も一緒にしましょう」

「ええつ・・・大丈夫ですか？右京さん・・・」

心配する亀山刑事を横目に、少し微笑むと、女の後ろについてゆく。

チャイムと共に、顔を出した老女。

怒っている隣の嫁の後ろに特命係の刑事が二人手を振っていた。

「あら・・・？何か？・・・刑事さんたちも一緒に？」

きよとんと驚いた顔のお婆さんは、わけがわからないといった表情。

「ちよつと婆さん！うちの庭の生垣を枯れさせたり、蜜柑の皮を捨てたり・・・どういうつもり？」

「え・・・」

いきなり噛み付く女の言葉に、老女は青ざめた。

「まあまあ・・・積もる話は玄関先でなく、家の中で」

「そうね。上がらせてもらうわよ！」

「いえ・・・僕が言っているのは、貴女のおうちですよ」

涼しい顔で言う杉下警部に女は振り返って怒った。

「なんでうちに婆さん入れなきゃいけないのよっ！！」

「僕が察するに・・・お婆さんはお爺さんにお線香をあげたかったんじゃないですかね？」

・・・だから、居てない猫を居ると言ってみたり・・・生垣から庭に入ってきたり・・・したんじゃないですか？

蘭子さん、お家に入ってみたかったんですね！？」

老女は、杉下の言葉に小さく頷いた。

「だから、一度お婆さんにお線香あげてもらえば納得されるわけですから、こういうことは二度とないでしょう。」

僕からもお願いします・・・」

ぺこりとお辞儀した刑事二人に、女は「仕方ないですね・・・」と溜息をついた。

こうして、老女と特命係の刑事二人は隣家に線香をあげさせてもらうことにした。

「素敵な・・・純和風の家ですね。なかなか趣もありますし、家具もいいですねえ」

杉下警部の褒め言葉に、女は少し気をよくしたようだった。

「私も、この家はなかなか気に入ってるんですよ。」

ちよっとした細工なんかもしてあって、昔からこういう家に住みたかったから」

「昔から・・・」

失礼。

あなたとこの家のご主人はずいぶん年齢が離れているようですが・・・どうやって知り合っただんですか？」

「・・・もともとヘルパーやってて、この家に仕事で来てたんですが、でも爺さんとは家の趣味なんか合って、結婚したんです」

「そうですか。趣味が同じというのはいいですね・・・」

そうだ！こういう話はご存知ですか？

お寺などと言う『驚張り』の廊下というのは昔から人が床を歩くときに鳴る軋みからくるのですが、もともと敵が侵入したことを知ら

せるために人為的に作られたものであるともいわれています。

何か隠しておきたいものがあると、このように敵を警戒してわざと作られたようですよ。

これほど古風で立派な御宅だと、そういう類の仕掛けがあっても可笑しくなさそうですねえ」

冗談めいた杉下警部の話に、女の足がピタリと止まった。

「・・・へえ、驚張りの廊下ねえ。

うちにも、そういう類のものがあるかもしれませんよ。

・・・ちよつと見てみます?」

女は不気味に微笑むと、すつと襖を開けて奥の部屋へと案内した。

「 5 」 黒猫（前書き）

蘭子お婆さん「こんにちは 私が警視庁の特命係へ相談に行き、杉下さんと亀山さんという親切な刑事さんが飼い猫を捜してくれることになったんですよ。となりのお家にいそうな気がするんですがねえ・・・ 杉下さんがなにやら上手くとなりの家に行けるように話をつけてくださいました。 さて・・・これから猫捜しに参ります」

「 5 」 黒猫

案内された部屋は、特に変わり映えのしないものだった。

和室というより、むしろフローリングの床、壁紙もローズをあしらって、洋風の造りだった。

「・・・この部屋、なんだか仕掛けがありそうな気がしますませんか？」
女は杉下警部に尋ねた。

「・・・そうですねえ」

杉下警部は、しばらく部屋の中を歩き回ったが、特に何もわからなかった。

ずっと立ちっぱなしで疲れたのか、老婆がぺたりと座り込んでしまった。

思わず床に座り込むとき、どしんという音をさせてしまった。

「・・・ごめんなさい、足腰が痛んで・・・ちょっと座らせてくださいな」

弱弱しい声で蘭子お婆さんが言った・・・その時。

にやゝ

猫の鳴き声が聞こえた。

「おや・・・？猫？」

杉下警部が、聞き耳をたてた。

「猫なんて！いるわけないでしょ！刑事さんだって、婆さんの作り話だって言っただじゃない！」

女はギヤアギヤアと騒いだ。

「・・・しっ、お静かに！」

杉下警部は人差し指をたて、口元にもっていく。

女は黙った。

にゃーあ

足元から、確かに猫の声がした。

「床下です！ 床下に猫がいるんです」

杉下警部は念入りに床を調べた。

よく見るとフローリングの床は木目調が縦に綺麗に揃っている。しかし、ある部分だけ、四角く切り取られて張りかえられたように木目が横になっているところがあった。

すつと床のその部分をなでると、明らかに切り目が入っている。

「な・・・何？」

女はその床の部分に何かあるのだと気付いた。

しかし、床はびくともしない。

押しても、引いても・・・叩いても。

杉下警部は一旦その場を離れ、ぐらりと部屋を見る。

そして入り口の襖の足元に目を止めた。

襖の溝をよく見ると、変わった細工がしてあった。

細工に指を入れ、ちよつと力を入れると・・・細い木のレバーのようなものが現れた。

「いいですか？」

杉下警部が合図して、そのレバーを思い切り引いた。

同時に床板がスライドした。

床に四角い穴があく。

にやゝ

その穴からぴよこつと白い猫が顔を出した。

蘭子お婆さんの顔をみて、猫なで声で走り寄る。

「・・・よかつたゝ無事で！」

蘭子お婆さんは猫を思いきり抱きしめた。

「本当に猫は居たようですね」

杉下警部は女に言った。

女は床に開いた穴に駆け寄った。

鼻息荒く、女は床下から手提げ金庫を取り出した。

「あつた・・・こんなところにあつたんだわ！」

狂気じみた声でいう彼女の横で亀山刑事が床下に散らばる白い錠剤を見つけた。

「右京さん！・・・これ？」

手袋をはめた杉下警部が錠剤をハンカチに包んだ。

そうしている間に、まだ何かあるのではないかと手を突っ込んだ亀山刑事は、思いもかけないものを取り出した。

「・・・練炭？なんでこんなところに・・・」

金庫を抱きしめていた女の顔色が変わった。

「なつ・・・何よ！私は知らないわよ！！そんなの！」

だいたい、ここは刑事さんたちが見つけたんでしょ！！

私の知ったことじゃないわよっ」

髪を振り乱して取り乱す女を落ち着かせようと、亀山刑事が「まあ・・・」と手を出した。

「触らないでよ！！」

女は金庫を取られると勘違いしたのか、亀山から金庫を遠ざけよう

とするあまり、傍の壁に思いきり金庫を叩きつけた。
もともと古くなっていて錆び付いていたのか、その金庫の鍵が外れ、
中にあつた札束や通帳、権利書が散乱した。

「あああ!!」

女は散乱したそれらを掻き集めようとしたが・・・

杉下警部は、その中でも「遺言書」と書かれた白い封筒を手にして
いた。

それに気付いた女が封筒を取り返そうと襲いかかったが、亀山刑事
に取り押さえられた。

「・・・どういふことが、説明していただけますか？」

静かな声で杉下警部が女に言った。

「 6 」 遺書（前書き）

猫「にゃくにゃくにゃ」

杉下「・・・だ、そうです」

亀山「右京さん、それじゃ伝わりませんよ！猫です、猫がでてきました」

杉下「亀山君、それじゃ簡潔すぎませんか？」

Ⅱ 6 遺書

「爺さんの遺言状よ・・・」

アイツ、何を血迷ったか・・・自分の遺産は全てこの婆さんにやるって言い出したのよ！

・・・ざけんじゃないわよ！！

なんのために、私がっ あんなジジイと結婚したと思ってるのよ！
バカにするのもいい加減にして欲しいわ・・・」

女は荒れた表情で髪を掻き毟りながら毒づいた。

杉下警部の手に握られた遺書と書かれた封筒は、糊付けされていなかった。

「・・・見ても、よろしいですか？」

「どうせ、見るんでしょっ」

唾を飛ばして言った女の言うとおり、杉下警部は白い便箋を取り出して、ゆっくり開いた。

すばやく目を動かし、読み終えたのか・・・ふっと微笑んだ。

「・・・あなたは、これをご覧に？」

女に問いかけたが、女は首を振った。

「・・・あの日、爺さんは私に言った。

『・・・お前にやるくらいなら、蘭子さんに遺す』って。

その遺書を私に見せながら言ったんだから・・・書いてある事なん

て誰だつて想像できるでしょ……」

「……読みましょうか？」

「いいわよ!!」

「読んでくださいっ!!」

蘭子お婆さんが力の限り叫んだ。

「わかりました……」

遺書を読み始めた杉下警部を止めようと、女はとびかかるが、さつと亀山刑事に止められる。

『智絵子さんへ

あなたがこの手紙を見ているということは……私が死んだからだろうか。

今まで老人に尽くしてくれてありがとう。

あなたのおかげで 明るい日を過ごせました。

ささやかながら私の遺産は全てあなたのものになりたい。

しかし……

あなたは今までの罪を償わねばいけません。

あなたがどういう目的で私に近づいたか……それはよく承知しています。

私が死ぬと大金があなたのものになるはずです。

これを機に……すっかり綺麗な身になって、人生をやり直してください。

私の最後の忠告をあなたは聞いてくれただろうか？

あなたが賢明な判断をしてくれると願います。

私が死んでも 決してあなたのせいじゃありません

でも・・・

命の尊さを教えることができたなら幸いです』

「隠しておきたかった品？」

亀山刑事の手にある練炭をそつと指差して杉下警部が言った。

女は乾いた目から一筋の涙を流した。

「あの日・・・」

爺さんはその練炭と遺書を手にして言ったんだ」

女はその日の出来事を話しはじめた。

出かけようと化粧台の前でメイクしている最中に、後ろで爺さんの声がした。

「・・・自首したほうがいい」

「・・・何？」

女は振り返って爺さんを睨んだ。

「これ、練炭だろう？」

このまえ・・・近所で練炭自殺した人がいるって聞いたが・・・

たしか、君の仕事先の人だったよね？」

「だからあ？」

「・・・最後に会ったの、君だろ？」

女は無言だった。

「練炭はまだある・・・何人殺す気だい？」

「な・・・何言ってるの！」

「もうやめるんだ・・・こんなことっ！

君が金目当てで私と結婚したことはわかっている。

金なら十分にあるじゃないか！」

「・・・十分って？誰が決めるの？・・・私でしょ？」

「いいか・・・自首しないならっ

殺人犯のお前にやるくらいなら・・・蘭子さんに遺すっ！」

爺さんはそう言って、遺書をふりかざした。

「なんだって！！・・・なんで隣の婆さんが出てくるんだよっ

・・・ジジイ、待ちなっ！！」

怒り狂った女から爺さんは逃げた。

怒りのままに追いかけた女は足元にあったドライヤーのコードに
つのめり、バランスを崩し転ぶ。

「いてて・・・」

その隙に爺さんは女の目の前から姿を消した。

膝を擦りむきながら女は爺さんを探した。

奥の部屋で爺さんの声が聞こえた。

「見つけたよ！！」

女が見つけた時、爺さんは心臓の発作で息も絶え絶えになっていた。

「爺さんっ！！死んじや駄目だよっ！！……いつもの薬は？」

もともと心臓の持病のある爺さんは常備薬を常に持っていた。
しかし、いつもの薬の入れ物は空だった。

「爺さん！！いつもならここに入れてるのに！！……予備にあった
だろ？」

ちよつと見てくるからっ！！待ってるんだよ！！」

たしか爺さんのタンスにあったはず、と女は立ち上がったが……
すでに爺さんは事切れていた。

「爺さんのバカー！ 遺書はどこに隠したんだよ！！」

女は泣き叫んだが、辺りに遺書らしいものはなかった。

「……それで、あなたはこの家をくまなく探していた？」

女が話し終えるのを待って杉下警部が尋ねた。

「この部屋にあるだろうなと思っていただけ……どうしても分
らなくて。」

こんな隠し部屋があつたなんて……知らなかった。

この家に住んでいたのに……知らないなんて滑稽よね」

女は自嘲気味に笑った。

「 7 」 願 い（前書き）

伊丹「・・・特命係が猫探しをしていて、どういうわけかこの家の爺さんの遺書を見つけちゃった。で、それをきっかけに女が自供し始めた・・・とかいうわけで、俺達はバカ亀につ！また呼び戻されてる途中だ！」

芹沢「先輩、車の中で暴れないでくださいよう」

三浦「伊丹、おちつけ・・・」

「 7 」 願 い

智絵子さんという若い女はすっかり吹っ切れたようだった。

練炭による自殺にみせかけた殺人。

絵に描いたようなシナリオが上手くいくわけないと最初は思ったという。

「ほんと・・・

うまくいくかな？ いけばいいなって感じで。

ヘルパー派遣先のお年寄りも、これ以上生きてたくないつて言ってたし。

・・・上手くいったら、一石二鳥くらいに思ってたの」

「この近所の最初の練炭自殺事件ですね。

確か亡くなった方も身寄りの無い独居老人でしたね」

女の話に杉下警部が事件の記憶をたどる。

「年寄りみんなそう。

『死にたい』『生きていてもしょうがない』っていうじゃない。

本当にそうなのかなって思えてきて・・・

じゃ、財産ももういらないよねって思うと、ある程度のお金を拝借してから・・・」

「殺そうと思ったんですね？」

「殺そうっていうんじゃないかって・・・

死ぬための『手伝い』をしてあげるんだっていう気持ちになったかもしれない。

そしたら、その代金をもらうのが当たり前だって」

「あのなら！」

亡くなった人にも家族や悲しむ人が大勢いるんだぞ！

当たり前ってなんだ！『手伝い』ってなんなんだよ！！」

たまらなくなつて、亀山刑事が壁にあたる。

「・・・なんで気付かなかつたんだろう」

智絵子の目は蘭子お婆さんにむかつた。

「・・・気付いてよかった。

お爺さんも、智絵子さんに気付いて欲しかったんだと思いますよ。

あなたも・・・本当はお爺さんが亡くなって悲しかったでしょう？」

蘭子お婆さんは優しい目で智絵子さんに問いかけた。

「そんなこと・・・あるわけないでしょ。

もともとお爺さんと結婚したのもこの家目当てなのに！」

「それでも、家族だったんですよ」

蘭子お婆さんはそう言ったが、女は首を振った。

「・・・さっき別の刑事さんが言つてた火災の事件も、私が用意し

た練炭によるものです」
女はそろりと両手を杉下警部に差し出した。

神妙に構える女の手をそつと押し返すと、杉下警部は「亀山君、伊丹刑事に連絡を」と言った。

「はい・・・」

亀山刑事が携帯電話を取り出すと、彼女が自首したことを告げた。

しばらくして現れた伊丹刑事たちに連れられて、女はこの家を後にした。

「右京さん、俺たちは・・・いいんですか？」

亀山刑事はそう言ったが、杉下警部は「いいんです」と彼らの乗った車を見送った。

「僕たちの事件はまだ終わっていませんよ」

そう言つて、くると振り返ると、蘭子お婆さんに微笑んだ。

「・・・猫も戻ったことだし、これで事件は終わりですよ」

蘭子お婆さんは満足そうに言う。

「いえ・・・僕が言いたいの、何故猫がこの床下から出てきたかという事です」

「さあ？」

「猫が入れる入り口など、縁の下にはありませんでした」

「そう?」

「縁の下といえば・・・蜜柑の皮を見つけました」

「だから?」

「猫を縁の下に入れたのは、あなたですね?」

杉下警部の指摘に、蘭子お婆さんは「ふふふ」と笑った。

「やはり、そうでしたか。」

猫は柑橘系の匂いを嫌います。

それで猫が出口に来ないように縁の下付近に蜜柑の皮をばら撒いた。

もともとお爺さんになついていた猫だから、お爺さんの匂いのところへ寄っていくはず・・・

誤算は、猫があまり鳴かなかったことでしょうか?」

「・・・そうね。」

数日お腹がすいた状態が続くかと思って餌をいっぱいやっておい
たのがいけなかったのかしら?

それとも、思いのほか縁の下には餌になるネズミがいっぱいいたの
かもしれないわねえ。

もつと猫が鳴いて、お爺さんが遺したものを教えてくれると思って
いたのに・・・

素人考えは上手くいかないわ」

蘭子お婆さんは、ふふふと笑った。

「お爺さんが遺した物って、何か知ってたんですか？」
亀山刑事が蘭子さんに聞く。

「いえ・・・何も。」

でも、お爺さんが私に何も言わずに智絵子さんを遺して逝くわけないと思ってました。

お爺さんは彼女を自分の娘のように思っていたんですよ。
だから、自分の命をかけてでも彼女に犯罪をやめて欲しかったんでしょうね」

「ポーの黒猫ならぬ蘭子さんの白猫でしたね。」

あなたのシナリオに、上手く協力できたでしょうか？」

杉下警部の言葉に、蘭子さんはぺこりとお辞儀をした。

「それ以上のことだったわ。」

あなた方でよかった・・・ありがとう」

白猫を抱いた蘭子お婆さんに見送られながら、特命係の二人は家を後にする。

「俺たち、すっかり蘭子さんに踊らされたってわけですか？」

亀山刑事の問いに、杉下は笑う。

「いいではないですか。」

蘭子さんのシナリオを少々軌道修正させてもらいましたが、これで亡くなったお爺さんも満足なのではないでしょうか」

「そうですね」

そしてまた、二人はいつものように特命係の部屋に帰る。

「 7 」 願い（後書き）

どうでしたでしょうか？

特命係をメインに、ほのぼのしたお話を書きたいなあ・・・とお話をはじめてみました^^

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615j/>

相棒【老女と猫】

2010年10月11日11時42分発行